OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈社会講談〉の誕生と展開 ： 白柳秀湖の『藤十郎と富蔵』と『事宵の叛逆』を中心に
Author(s)	ケオフォンランシィー, ペンポーン
Citation	日本語・日本文化研究. 2019, 29, p. 204-213
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/73707
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈社会講談〉の誕生と展開
－白柳秀湖の『藤十郎と富蔵』と『事實の叛逆』を中心に－

ケオフォンランシィー　ペンポーン

1. はじめに

大正時代はわずかな 15 年間の短い時代だったが、社会的に大きな影響を与える数多の出来事が起った時代であった。特に、第一次世界大戦後の大正 8 (1919) 年からは急激な産業構造の変化により、好況と不況の交替及び工業と資本の集中による都市労働者の激増が起こり、さらに都市化現象と農村共同体の変質も始まっていた。米騒動、労働争議、普選運動などの大衆的な形態の運動は、日本社会に構造変化をもたらした。また、高等教育が大衆化された結果、知識労働者が増加し、社会的機能に大きな質的変化が起こった。新しい知識人たちは、自由に浮動する階層として、自らが得た高度な教養をもって出身階級ではない階級への帰属選択ができるようになった。それに、大正 6 (1917) 年に伝えられたロシア革命の成功は、若い知識人に大きな衝撃を与え、その結果、労働運動が盛んになっていった。このように社会主義思想の普及に大きな力を及ぼしたのは、大正 8 (1919) 年に創刊した大正デモクラシーの論客たちや社会主義者が執筆した『改造』『解放』『我等』の三雑誌、河上肇の『社会問題研究』、山川均・堺利彦の『社会主義研究』などである[1]。

一方で、当時、庶民に身近な芸能であった講談が「民衆教化」の具として注目されていたが、第一次世界戦争後の恐慌による労働争議や米騒動など、激化する民衆運動に対する風紀粛正策として、講談の倫理性が求められた。その結果、〈社会講談〉というものが生まれてきたのだという[2]。〈社会講談〉は大正中期から注目されたもので、大正期後半には『改造』誌によって、社会主義思想を講談の素材にしたという試みが始まり、〈社会講談〉欄が設けられた。

研究側では中山弘明[3] (2001) が伝統的な旧話を大胆に読み替え、正史に俗説を対置させ、また一連の〈騒動〉を読み手に想起させることで、資本主義社会の構造的断裂を露わに描き出すものだとされている。または、奥野久美子[4] (2008) も講談という身近な材を使って民衆を教化し、当時盛んに叫ばれていた社会改造を推進しようというものだと述べている。つまり、〈社会講談〉とは社会主義思想を講談素材の小説に乗せて説き、資本主義社会の構造を批判するために描かれたものだと言われている。

なるほど、〈社会講談〉は社会の反映をしようとしていることは確かである。だが、白柳秀湖の『藤十郎と富蔵』に「講談改造の三つの方法」と題した一文では、講談改良を講談雑誌や「歴史小説」の形で実現することを盛んに訴えていた。彼は、講談の中にも優れたものはあるが、人生もしくは社会の「解釈」というような作品がない[5]とし、社会講談『事実の叛逆』の序文でも事件やある階級の人々を中心にして、人生の一面が書いてみたい[6]と主張しているので、白柳秀湖は中山や奥野と違う意図で、〈社会講談〉を描いたと考えられる。

そこで、本稿では白柳秀湖の〈社会講談〉の前期作品『藤十郎と富蔵』（大正 10 (1921) 年）と『事實の叛逆』（大正 10 (1921) ～12 (1923) 年）を中心にし、作品の特質及び白柳秀湖

の考え方を明確にする。従来、〈社会講談〉は、文学史上において、プロレタリア文学へと続く過渡的なものとして位置づけられてきた。また、社会の反映をしようとしているものとばかり考えてきた。しかしながら、それとは全く違う〈社会講談〉も存在していることが、白柳秀湖の作品には見られるのである。

2. 白柳秀湖と〈社会講談〉の誕生

〈社会講談〉は大正期に形成された新しいジャンルの小説体の「新講談」の一つであり、大正 8 (1919) 年の初夏の『改造』社の晩餐会で白柳秀湖の「漫談的」な話しによって始まったものである。白柳秀湖 (1884～1950) は明治から昭和初期にかけて活躍した文学者、史論家である。大学在学中より社会問題に関心を寄せ、平民社の運動に参加し、『火鞭』及び『駅夫日記』などの創刊で社会主義の新しい世代として注目された作家・社会批評家であった。〈社会講談〉を創案し、また『坂本龍馬』などの大衆文学も執筆した人物[7]でもある。当時、白柳秀湖以外に、堺利彦及び荒畑寒村なども多様な〈社会講談〉の試みを行っていた。

白柳秀湖の〈社会講談〉作品は『社会講談選集』の凡例で指摘しているように「これで僕の社会講談が 3 冊世に出たこととなる。第一は『藤十郎と富蔵』第二は『事實の叛逆』第三は即ち本書である。」[8]という 3 作品がある。これらの作品群は、前期（大正 10 (1921)年～12 (1923) 年）と後期（大正 13 (1924) 年～大正 14 (1925)年）に分けることができる。具体的には、前期作品が『藤十郎と富蔵』と『事實の叛逆』、そして、後期作品が『社会講談選集』となる。

本稿では白柳秀湖の〈社会講談〉に対する前期の考えを論じるために、前期作品の『藤十郎と富蔵』と『事實の叛逆』のみを取り上げて分析する。

3. 白柳秀湖の『藤十郎と富蔵』と『事實の叛逆』における〈社会講談〉の特質

3.1『藤十郎と富蔵』

『藤十郎と富蔵』は安政 2 (1855) 年に藤岡藤十郎と犬塚無宿の富蔵が江戸城本丸の金蔵から小判 4 千両の大金を盗み出し、2 年後に捕らえられ、市中引き回しのうえ、安政 4 (1857) 年 5 月 13 日千住で処刑された事件を素材したものである。大正 10 (1921) 年 5 月 20 日に発行した金剛社の社会講談第一編だが、その前には『改造』誌の大正 9 (1920) 年 7 月号の〈社会講談〉欄にも、「藤十郎と富蔵」として掲載したものがある。しかし、それは『藤十郎と富蔵』の後半の話のみとなっている。

『藤十郎と富蔵』の「講談改造の三つの方法」と題された文章によると、白柳秀湖は 3 つの講談改造[9]のうち、『藤十郎と富蔵』を「旧来の講談の条理をそのままに追ひ、それを新しき筆致と、新しき思想にて、新しく紹介若しくは解釈して行く」[10]という改造方法によったもので、かつ「物語体」[11]で書いたものであるという。その新しい思想及び解釈は、具体的には「講談改造の意義を最も鮮明にするには、『藤十郎と富蔵』の如き（一）の行方は効果の點に於いて、少しく骨折損のくたびれ儲けたるを免れぬ。現に藤十郎とお袖との戀、富蔵の生ひ立ちなど前半の叙述では読者の中にナーンだ馬鹿々々しいとアイソを盡して了ふ人があるかも知れぬ。併し、それが進んで富蔵の復讐から後に至るとグッと見直して来る。之は（一）の方法による以上止むを得ない。それで何うかと云ふと作者には、前半の講談式出鱈目を、兎にも角

にも合理的のものにする點に馬鹿らしく骨が折れて居る。」[12]と述べている。つまり、白柳秀湖は講談改造の（一）の方法を効果的にするために物語の前半を主人公の藤十郎とお袖との恋と富蔵の生い立ちを叙述し、元の講談式の出鱈目なところを合理的のものにしようとしているのである。

では、藤十郎とお袖との恋について例文を見てみよう。まず、藤十郎とお袖との出会いの場面には*「途端に二人の視線がパッタリと途中で會つた。隣合せに住む此若い美しい一對の燃えるやうな視線が恁うして相合ふのは今日が初めてではなかつたものと見え、二人は殆ど語を交して會釋せぬばかりに親しいほほえみを交した。」*[13]という二人がお互いに恋をしている場面が見られた。それだけではなく、お袖に対する藤十郎の気持ちの場面にも*「身分の違ひを思つては、我と我身のはかない空想を嘲つて居た押田の一人娘に対する恋が、ツイこの一ヶ月ばかりの間ひ思ひがけもない現実となつてうれしい文の遣取からトウトウ今日の首尾までこぎつけた飛立つばかりのうれしさと、此程から持越しの心配事とが小さい頭腦の中でらやうど凧の糸のやうにもつれて、藤十郎には何うしていいのか分ららなくなってしまつた。」*[14]及び藤十郎に対するお袖の気持ちの場面にも*「身分が違へば何故に思ふ御方と添はれぬか。身分を隔てる墻はあつても、戀を距てる墻はない。私達は現にその厳しい墻を乗越えて勝手に身分を捨てた。」*[15]という場面のように、藤十郎とお袖がお互いに強く心の関係を持っている背景を描き、お袖を助けるために自分が盗んできた小判を売りに行くという後半の話に合わせる合理的な話を作ろうとしていることがわかる。

また、富蔵の生い立ちについては*「『私は江戸の浅草田原町三丁目に小間物問屋を渡世にいたして居りまする重助と申するものの女房で、まつと申します。』『オ、さうかえ。』『また、これは倅でございまして富蔵と申します。夫、重助は佐野に御華客が御座いまして、昨年の暮れ取引のことでそこへ参ると云つて家を出ました切り、いまだに戻つて参りません。（中略）』*[16]という富蔵の両親及び自分の子供のように育てくれた犬塚の太左衛門について述べていた。つまり、白柳秀湖は後半の話になる藤十郎と富蔵の行動を合理的にするため、藤十郎とお袖の恋話と富蔵の生い立ちの背景を描いたと考えられる。

さらに、白柳秀湖は話の面白さも考えながら、「私はかねて活動写真で、同時間に起こる二つの偶然の出来事を交互にくさりづゝ映写して行つて結局それが一つの条理に合するのをひどく面白いと思ひ、本篇の前半に二ケ所ばかりその表現法を試みた」[17]という試みも行った。その2つの偶然の出来事とは、源吾が富田屋で偶然に仁助と出会い、藤十郎の陰謀や現状を全て聞きた場面と桜井家の女中から自分についての噂を聞き、家出をしたお袖は源吾と藤十郎と蕎麦屋で偶然に出会った場面である。これらの出来事をきっかけにして、後半の話の藤十郎と富蔵が江戸城の金蔵から小判四千両の大金を盗み出すことを合理化しようとしたのである。

また、それを踏まえて、白柳秀湖は*「弘化元年といへば、例の黒船騒動で、政府筋の人々は世の目も寝ぬやうなあはただしさ。（中略）百姓や町人は何處を風が吹くかと云つたやうな顔で、太平の春を迎ふべく暮れの巷は、歳暮のの品を持つて走る小僧、威勢の好いお華客廻りの絆纏著で見るからに忙しかつた。但し、その忙しさも、お大名や、旗本の邸の立ち並ぶ山の手の町の空気を動かすには、江戸が餘りに廣かつた。」*[18]という黒船騒動に関する時代背景及び*「處が此州警察の驚くべき権柄は、その手先となって働く岡引、目あかしの徒によつて、逆に*

善良なる人民を苦しめるの具となつた。さうして其因襲の久しき、彼等下級警吏の残忍性は實に殺人鬼以上であつた。」[19]というような社会制度についての状況も描かれている。それに、山田源吾がお袖の手紙を読んだ時の藤十郎の考えを表す「*山田源吾は極まりが悪さうに頭をかかへた。藤十郎は、アヽ人間の自惚れほど恐ろしいものはないと心の中に思ひながらも、『イヤ何と致して、人は情の為に生きる。それは相見互見で御座る。』*」[20]という文章にも主人公を通した人間の解釈のような表現も見られた。

以上、白柳秀湖の言説と作品を合わせて見てきた。しかし、作品からしか読み取れない部分もあるので、それについて論じておこう。白柳秀湖は主人公の藤十郎とお袖との恋と富蔵の生い立ち以外に、山田源吾とお袖の恋と藤十郎の生い立ちも描かれていた。具体的には藤十郎の背景を「*藤十郎が十九の秋、父の隼人はフトした風邪が元で、終に帰らぬ人の数に入つた。もとより御気に入りの藤十郎であるから直に跡目相続を仰せつけられて、御扈従から千八百石のお家の用人に取立てられた。*」[21]などというように、用人になるまでの家族背景を設定している。また、「*源吾はお袖の事を思ふまいとして思はずには居られなくなつた。*」[22]というお袖に対する源吾の恋も加えている。白柳秀湖は藤十郎と富蔵の生い立ちに両者が良い人というイメージを設定したが、物語中に恋やお金に関わる事件によって、最終的にお金を奪う行為に至ったことにしているのである。

このように白柳秀湖の『藤十郎と富蔵』には新しい思想及び解釈という講談の改造を中心にしていることが分かった。彼は各登場人物の詳しい背景を設定するなど、物語の前半部分に色々な工夫をしている。それによって講談式の出鱈目なものは合理的な物語になると同時に、従来とは逆のイメージを持った主人公の物語となっているのである。

では、次にもう一つの白柳秀湖の〈社会講談〉の前期作品の『事實の叛逆』はどのような書きかたで〈社会講談〉の考え方を表しているのかを見てみよう。

3.2『事實の叛逆』

『事實の叛逆』は、大正 14 (1925) 年に発行されたもので、大正 10 (1921) 年から大正 12 (1923) 年に至る 4 年間に掲載された白柳秀湖の〈社会講談〉作品を集めたものである。この本に集められた短編は次の 16 作品である。

1.「郡兵衛の脱走」（『改造』大正 10）
2.「弓矢の家」（『現代』大正 10）
3.「鰯の屋の嫁」（『改造』大正 10）
4.「鬼あざみ」（『現代』大正 9）
5.「小雀吉五郎」（『週刊朝日』大正 13）
6.「丸髷の罪」（『太陽』大正 13）
7.「清姫物語」（『サンデー毎日』大正 12）
8.「智慧なし伊豆」（『サンデー毎日』大正 13）
9.「腹きらず物語」（『新小説』大正 13）
10.「晩香坡の妹背山」（『現代』大正 12）

11.「恋の日本左衛門」　（『國粋』大正 10）
12.「平井権八の出奔」　（『現代』大正 10）
13.「天保の政変」　（『実業の世界』大正 10）
14.「明暦の大火と閣老」　（『週刊朝日』大正 12）
15.「福原遷都」　（『サンデー毎日』大正 13）
16.「大杉山の騒動」　（『改造』大正 12）

以上は『事實の叛逆』に目次で確認できるものであるが、それぞれの雑誌に掲載された年は別途、筆者自身が確認したものである。雑誌に掲載された年については白柳秀湖が大正 10 (1921)年から大正 12 (1923)年に至るのものだと述べているが、筆者が改めて確認したところ、大正 9 (1920) 年ごろに掲載されたものもあることが分かった。

では、この『事實の叛逆』に集められた短編の〈社会講談〉作品が、どのような作品なのかを見てみよう。『社会講談選集』の凡例によると「『事實の叛逆』には舊講談を改造したものも入れてあるが、それから進んで全然新しい方面を開拓しようとした努力の作も入れてある。」[23]と白柳秀湖が指摘している。つまり、『事實の叛逆』に集められた作品は『藤十郎と富蔵』のように講談の改造のみを中心にし、描いたものとの違いが見られる。それは、「郡兵衛の脱走」及び「清姫物語」などのように元講談を改造したものもあるが、「腹きらず物語」及び「明暦の大火と閣老」などのように事件及び歴史的の人物のみを素材にし、まったく新しく作ったものもあるということである。

それに従って、『事實の叛逆』における白柳秀湖の〈社会講談〉の考え方を見てみると、『事實の叛逆』の自序には「心ばかりが人生ではない。私の考えからすれば、心と雖時の影響、所の支配を受けることは免れぬ。言ひ換ふれば、環境といふものを無視して、心の働きを見ることは出来ぬ。」[24]と述べている。この文章から、前期作品における白柳秀湖の〈社会講談〉の考えには新しい思想及び解釈の講談改造だけではなく、その主人公に与えるの環境も注視しようとしていることがわかる。さらに白柳秀湖は、「さうして全然主人公なしの讀もの、即ち或る事件を中心としたり、或る階級の人々を中心としたりする人生の一面が書いて見たくなつた。」[25]とも述べている。このように『事實の叛逆』の作品は主人公の環境を注視しながら、講談の形で事件及び或る階級の人々を中心にしたものが描いている。では、それぞれの事件及び或る階級の人々を中心にした作品を見てみよう。

まず、事件を中心にした『事實の叛逆』の作品は「郡兵衛の脱走」、「小雀吉五郎」、「腹きらず物語」、「晩香坡の妹背山」、「平井権八の出奔」、「天保の政変」、「明暦の大火と閣老」、「大杉山の騒動」だと思われる。事件を中心にした作品というのは、作者が歴史上に実際に起こった事件の登場人物及び背景を作品の構想として利用しているものである。本稿では「郡兵衛の脱走」を例にして、作品の特質及び〈社会講談〉の考え方を確認しておこう。

「郡兵衛の脱走」は大正 10 (1921) 年 1 月の『改造』誌に掲載された作品で、『赤城士話』を素材にしたものである。この話は赤穂事件での江戸急進派の仇討ちに突然脱盟した高田郡兵衛の話である。簡単にあらすじを述べておこう。元禄 14 (1701) 年 3 月 14 日、浅野長矩が江戸

城本丸御殿松之大廊下で吉良義央と刃傷沙汰になり、即日切腹となった。そのため赤穂浅野家は断絶となる。その後、浅野家の仕えの高田郡兵衛と高田馬場の仇討で有名になった堀部彌兵衛の養子の安兵衛と郡兵衛の友達の奥田孫太夫の3人は同年4月に郡兵衛は堀部武庸と奥田重盛とともに江戸から赤穂へ赴き、大石良雄に篭城を主張した。赤穂城明け渡し後、郡兵衛は江戸に戻り、堀部らとともに江戸急進派を浅野家中に作って仇討ちを強硬に主張し、大石に軽挙暴発を抑えられた。しかし、郡兵衛は同年12月頃に突然脱盟したという話である。

このように白柳秀湖は「郡兵衛の脱走」に赤穂事件を通し、江戸急進派の顔に泥を塗り、同志たちに大変に怒られた高田郡兵衛の人生の一面を描いたのである。まず、仇討ち計画から脱走した郡兵衛の考えを見てみよう。郡兵衛は*「彼は菊代と云ひ交したでもなく、又、復讐の志を捨てた譯でものないのに、同志に對して何となく罪を犯したやうな心持ちで、堀部や、奥田に會ふのが云ひ知れず心苦しかつた。」*[26]と考えていたようである。つまり、郡兵衛には元々脱走しようとしている意図はなかったという解釈が見られた。

それに、高田兄弟の伯父の500百石の旗本の内田三郎衛門に才知のある郡兵衛に婿入りの縁談の時にも郡兵衛は*「郡兵衛は浪人以来、一方ならぬ迷惑をかけて居る兄の志を無にするさへ忍びざるに、當の菊代にた對してもかねて少なからず心の動いて居る事とて、如何して此縁談をことわってよいものか、我と我身の持扱ひ方に困つた。併し、武士道の大義からいへば、かやうな小さい義理は殆ど問題にならぬ。」*[27]というような気持ちで兄の志よりも自分の恋よりも武士道の大義の仇討ちを大事にしていることが分かる。しかし、縁談を断っている途中に兄の彌五兵が三郎衛門の怒りを押さえつけるように*「『（中略）實は彼奴、同志の人々と盟ひ、亡君の為に、復讐の大望を抱いて居る様子に御座ります。』」*[28]と郡兵衛の仇討ちの計画を言い出してしまった。それで、止むを得ず、縁談の話は見直されることになった。

その後、郡兵衛は安兵衛に全てのことを告げ、*「『既に出来てしまつた事は仕方がない。此上は暫く忍んで伯父御の意に従ひ、機會を見て一身を處決されるも亦忠義の為で御座ろう。』」*[29]と安兵衛に言われた。安兵衛は前から郡兵衛のことを疑っていたので、郡兵衛を仇討ちの計画から外したのである。つまり、高田郡兵衛は自分の意図で脱走者になったのではなく、安兵衛及び三郎衛門との影響により脱走者になったのだと白柳秀湖は解釈したのである。

以上には、主人公のイメージの反転が見られる。それ以外には忠義を注視に表現していた「『秘密を洩らす者は何も脱走者には限り申さぬ。忠義は我身一つの覚悟にて足る。（中略）』」[30]という文章もあった。このように白柳秀湖は歴史上の事件を利用しながら、登場人物の人生を違う面で解釈をし、もう一つの視点で事実を提供しようとしている。白柳秀湖は安兵衛の背景を叙述したことによって、主人公のイメージを逆にしたり、武士道の思想なども加えたりしている。

次は、或る階級の人々を中心にした『事實の叛逆』の作品を見てみよう。この作品群は「弓矢の家」、「鰯の屋の嫁」、「鬼あざみ」、「丸髷の罪」、「清姫物語」、「智慧なし伊豆」、「恋の日本左衛門」、「福原遷都」だと思われる。ある階級の人々を中心にした作品というのは作者が歴史上実在した人物を作品に登場させるが、その人物に関する場面は全て創作したものである。ここでは、例として「智慧なし伊豆」を見ておこう。

「智慧なし伊豆」は大正 13(1924)年 4 月 1 日の『サンデー毎日』誌に掲載したもので、松平信綱を登場人物にした物語である。松平信綱(1596～1662)は江戸初期の大名で、武蔵川越藩主である。将軍徳川家光・家綱に仕え、島原天草一揆・由井正雪の乱・明暦の大火などを処理した人物でもある。伊豆守だったので「知恵伊豆」と称された。[31] 簡単に「智慧なし伊豆」のあらすじを述べておく。世間により松平信綱は知恵伊豆と呼ばれているが、実は色んな人に遣り込められ、政治家として経験もなく、知恵がないと思われている人である。作品内には、その例として 3 つの出来事が取り上げられている。まずは城中で将軍の御着座の壁が破損し、白壁が所々落ちかかったことに、伊豆守が奉書の紙を貼り詰めるという提案をした。しかし、先輩の酒井讃岐守がそれを反対し、伊豆守に恥をかかせた。次は増上寺に法會のあった時、伊豆守が出過ぎた小栗又一組の陳列を注意し、小栗又一に怒られた話である。最後は、三代将軍が近郊の鷹野へ行った時に、突然に道の側にある大きなお寺で休憩することになり、お供の中にいた伊豆守は一番奥の部屋に休憩していたが、その時、その部屋の天井板に女を見つけた。この寺の和尚が人目を忍んで、女犯の罪を犯していたのである。翌日、そのことを将軍に伝えたが、将軍に無視されたという話である。このように伊豆守は家光に散々窘めれ、先輩の酒井讃岐守にも強い意見をされていた。三代将軍が死んだ時、皆追腹を切って死んだ中で、伊豆守一人だけが加わらなかったので、評判が悪かったという話である。

このように白柳秀湖は「智慧なし伊豆」の伊豆守という登場人物を通し、違う人生の一面を解釈した。歴史上では家光が死んだ時に殉死すべきだという批判を受けていた伊豆守だが、実は次のような環境の中で、殉死しなかったのである。その環境とは、物語の中に取り上げられている次の 3 つの出来事である。

まず、先輩の酒井讃岐守に遣り込められたことである。物語の中では、将軍の御着座の壁が破損した時に*「壁の落ちかかつた所に奉書の紙を貼つて御目通りを取つくらふことが、係り役人の働きなりや賞めて置いて善いことかも知らぬ、但しそれが老中の指圖ではソウ伊豆殿」*[32]と先輩の酒井讃岐守が伊豆守に言った。この文章のように伊豆守の行動は問題を解決できたものといっても、上の人の指示ではなかったため、悪いこととされてしまった。次は、貴殿の組の陳列が出過ぎた時に伊豆守が注意したという出来事である。

それに対し、伊豆守は*「『その仰せなれば、又一何をか申上ませうや。今夕推参致しましたは、私の預かりましたる組のものへ、直々の御指圖はそもそも如何なる思召によるか。たとひ御方なればとて、私をさしおいて、私の預かりましたる組のものを御いろひ有るべき事にあらず、（中略）』*[33]と小栗又一に怒られてしまった。これもまた、伊豆守が小栗又一の担当している陳列の組に指示を出してしまったという出来事である。

最後は、三代将軍と共に近郊の鷹野へ行った時のことである。伊豆守は、休憩していたお寺の部屋で女を見つけた。それで、この寺の和尚が女犯の罪を犯していることが分かった。伊豆守はそのことを将軍に伝えたが、無視された。将軍は伊豆守に*「天下の政道は佛の教を以て則とはせぬ。僧侶にして女犯の罪を犯すものあらば佛罰覿面に至るであらう。」*[34]と言い出し、伊豆守の意見には賛同しない。

また、物語の最後には*「知恵伊豆は井伊、保科の元老が逝き、酒井が隠れた後も、後進の阿部豊後守忠秋から度々厳しく突込まれ、死ぬるまで楽は出来なかつた。」*[35]という文章のよう

に、伊豆守は他の人たちとの関係があまり良くなかったとされている。このような環境の中で伊豆守は三代将軍の死んだ時に追腹を切る仲間にならなかったのは、彼の意図的なことではないという解釈をしているのである。

ここでも主人公のイメージは反転されている。それ以外には人間観を表す「世の中のことがすべて権力、金力で埒のあくやうに思ふのは抑も大きな間違ひ、今日は晴れのお能といふに（中略）」[36]という文章も見られた。

まとめて見ると『事實の叛逆』の特質としては、主人公に影響を与えた環境が注視されていることである。それを具体的に事件及びある階級の人々を中心にし、歴史上の話とは違う見方を提供している。この点は『事實の叛逆』の自序に「講談を書くやうになってから、幾分でも歴史を知り、事実を知つて居るのに、脚色の上から態々讀者に嘘を傳へるといふ良心の苛責を痛切に味はつた。」[37]ということが反映された結果かもしれない。

また、「政府が権力で事實を詐飾し、御用學者に書かせたものが、後世に立派な文献として尊重せられ、民間の志士が発憤して小説に託し、事實の真相を仄めかしたものが、後世に出鱈目の俗書として軽視されて居るやうなことはないか。」[38]とも述べた。つまり、白柳秀湖は当時の歴史という事実が、本当の事実ではなくなり、作り物となってきた状態を問題視しているのである。それ故、彼の〈社会講談〉は「社会講談は事實を脚色して讀まするのでなく事實をインタープレテートして讀まするものだ。」[39]として、事実の解釈を大切にしているのである。つまり、白柳秀湖は作品を通して、元の歴史と違う解釈をし、他の可能性を描いたのである。

以上、白柳秀湖の前期作品における〈社会講談〉の特質を見てきた。『藤十郎と富蔵』は講談の改造を考えながら、書かれたことは明らかである。一方、『事實の叛逆』は登場人物の環境を注視しながら、講談の形で事件及び或る階級の人々を中心にして書かれたものである。この描き方は白柳秀湖なりの事実の解釈し方とも考えられる。

4. まとめ

〈社会講談〉は庶民に身近な芸能であった講談の民衆運動に対する風紀粛正策として生まれたものだとよく言われる。しかし、〈社会講談〉の先導者である白柳秀湖は『改造』誌及び堺利彦たちとは異なった目的で作品を描いているように考えられる。彼の作品の特質及び〈社会講談〉の考え方は前期作品の『藤十郎と富蔵』と『事實の叛逆』で見られたように講談の改造を行いながら、歴史上及び講談上などの登場人物の人生の一面を解釈している。それに、前期作品の特質及び〈社会講談〉の考え方の変化も見られた。『藤十郎と富蔵』では講談の改造を中心にし、講談式の出鱈目なものを合理的にしようとしていたのに対し、『事實の叛逆』では主人公の心の働きより事件及び或る階級の人を中心にした物語を描き、異なった側面を提供していることが明らかになった。

5. 今後の課題

本稿は白柳秀湖の〈社会講談〉の前期作品『藤十郎と富蔵』と『事實の叛逆』の一部を分析し、作品の特質と考え方を見たものである。今後の課題としては後期作品の『社会講談選

集』を分析し、作品の特質及び考え方の変遷を明確にする。また、白柳秀湖の言説と作品を通して見られた考え方を確認し、文学史における白柳秀湖の〈社会講談〉の位置づけを考える。

【参考文献】

奥野久美子(2008)「博文館長篇講談と大正期文壇--荒畑寒村の社会講談を例に」『国語国文』第 77 巻第 9 号

五味文彦、鳥海靖(2013)『もういちど読む山川日本史』山川出版社

白柳秀湖(1925)『事實の叛逆』，玄文社

白柳秀湖(1925)『社会講談選集』，大鐙閣

白柳秀湖(1921)『藤十郎と富蔵』社会講談；第 1 編，金剛社出版

中山弘明(2001)「〈社会講談〉という戦法 -世界戦争と民衆芸術」『国文学研究国文学研究』第 135 号、早稲田大学国文学会

林淑美(1996)『日本文学史 第 13 巻』「20 世紀の文学 2」岩波講座

原道生　他編(1988)『日本文芸史□表現と流れ』（第 4 巻・近世）河出書房新社

毎日新聞　編者(2012)『大正という時代「100 年前」に日本の今を探る』毎日新聞社

山下泰平、大塚英志、川上量生(2011)「特別対談 山下泰平さん×大塚英志さん「講談速記本」をめぐる話: 起源・中身・ヒーロー像・そしてその遺伝子はどこにつながるのか」『熱風: スタジオジブリの好奇心』9(11)

---

[1] 林淑美(1996)『日本文学史 第 13 巻』「20 世紀の文学 2」岩波講座, pp.103-104

[2] 中山弘明(2001)「〈社会講談〉という戦法 -世界戦争と民衆芸術」『国文学研究国文学研究』第 135 号, 早稲田大学国文学会, pp.56 - 67

[3] 同前，p.57

[4] 奥野久美子(2008)「博文館長篇講談と大正期文壇--荒畑寒村の社会講談を例に」『国語国文』第 77 巻第 9 号, p.48

[5] 白柳秀湖(1921)『藤十郎と富蔵』社会講談 ； 第 1 編，金剛社出版，p.3

[6] 白柳秀湖(1925)『事實の叛逆』（自序），玄文社，p.3

[7] 日本大百科全書(ニッポニカ)

[8] 白柳秀湖(1925)『社会講談選集』（凡例），大鐙閣，p.1

[9] 白柳秀湖は講談改造を 1)旧来の講談の条理をそのまゝに追ひ、それを新しき筆致と、新しき思想にて、新しく紹介若しくは解釈して行くこと。2) 旧来の講談の条理を破壊し、唯その題材のみを取りて、全然新しき講談を作ること。3) 条理も題材も全く新しきものを選ぶこと。という 3 つの方法に分かれている。

[10] 白柳秀湖(1921)『藤十郎と富蔵』社会講談 ； 第 1 編，金剛社出版，p.1

[11] 白柳秀湖は講談改造の方法を 3 つに分かれ、形式を 1.物語体と 2. 評論体の 2 つに分類した。

[12] 白柳秀湖(1921)『藤十郎と富蔵』社会講談 ； 第 1 編, 金剛社出版, pp.3-4
[13] 同前, p.7
[14] 同前, p.11
[15] 同前, p.135
[16] 同前, p.190
[17] 同前, p.4
[18] 同前, pp.1-2
[19] 同前, p.252
[20] 同前, p.21
[21] 同前, p.27
[22] 同前, p.18
[23] 白柳秀湖(1925)『社会講談選集』（凡例）, 大鐙閣, p.1
[24] 白柳秀湖(1925)『事實の叛逆』（自序）, 玄文社, p.3
[25] 同前, p.4
[26] 白柳秀湖(1925)『事實の叛逆』, 玄文社, p.10
[27] 同前, p.15
[28] 同前, p.17
[29] 同前, p.21
[30] 同前, p.12
[31] デジタル大辞泉
[32] 前掲『事實の叛逆』, p.244
[33] 同前, p.252
[34] 同前, p.260
[35] 同前, p.262
[36] 同前, p.244
[37] 前掲『事實の叛逆』（自序）, 玄文社, p.4
[38] 同前, p.4
[39] 同前, p.4